

[研究ノート]

A.C.プーシキンのピョートル大帝時代への関心 ——叙事詩『ポルタヴァ』の創作を通して——

小松 佑子

はじめに

アレクサンドル・プーシキン (1799-1837) が歴史に取材した作品は数多くあるが、その中でも特にピョートル大帝をテーマとした一連の作品には、詩『スタンスイ』(1826)、散文『ピョートル大帝の黒奴』(1827) (未完)、叙事詩『ポルタヴァ』(1828)、叙事詩『青銅の騎士』(1833)、散文詩『ピョートル大帝の宴会』(1835)、歴史作品『ピョートル一世』(1832-1837) がある。

ここでは『ポルタヴァ』¹ を取り上げて、叙事詩とも歴史小説とも呼ばれているこの作品の歴史性について考慮し、プーシキンがここに登場する人物に興味を持った理由と、この歴史小説においてプーシキンが厳しく唱えた歴史の真実の描写はこの作品に正しく投影されたのかどうかを考察するのが目的である。

1. ウクライナで啓発されたゲトマン・マゼーパへの興味

リツェイ時代から政治批判的な詩を書いてきたプーシキンが、アレクサンドル一世の逆鱗に触れ、4年間に亘り南方へ追放された。その間の1820年9月30日より1823年7月2日までキシニョフでの勤務について。温厚なる上司インゾフ將軍は、プーシキンがキシニョフからキエフ、カーメンカ、オデッサへ出掛けることに規制を設けなかったが故に、詩人は比較的自由な生活を送ることが出来た。プーシキンの記憶の中で強い印象を残していたのは、1820年11月から翌年3月までカーメンカに領地を持つダヴィドフ家に滞在したことであろう。そこで、キシニョフとペテルブルクから集まった秘密結社の代表者たちが行った政治的討論、特にアレクサンドル一世の狂気の圧政についての討論は歴史小説を書く上での豊富な情報や啓発を詩人にもたらしたと考えられる。こうした経験の後でダヴィドフ家の家族とキエフ訪問時に、詩人はキエフ・ペチェールスカヤ・ラヴラでウクライナのゲトマン・マゼーパに処刑されたコチュベイ² とイスクラ³ の墓を見た。墓碑銘にウク

¹ Пушкин А.С. Полное собрание сочинений в 16 томах. М., 1948. Т.5. С.15-67

² ワシーリイ・コチュベイ、ポルタヴァのコサック裁判長官。

ライナ語で書かれた彼ら二人の心中を表す恨みの言葉、「真実のため そして皇帝への忠誠のため 苦悩と死の酒杯を飲み マゼーパの奸智により、永遠に無罪でありながら、頭を斧にて切り取られしなり」⁴ は、歴史の真実を求める詩人の心に強い印象を残したと考えられる。

この頃から芽生えたマゼーパへの興味は終始プーシキンを離さなかったようで、南方追放中の最後の一年（1823年7月3日より1824年7月末まで）はヴォロンツォフ伯爵を上司としてオデッサに勤務しているが、1824年1月18日、友人のリブランジーと共にベンデルイ⁵を訪ねている。ここは、ポルタヴァの戦いに敗北したスウェーデン王カール12世とマゼーパが逃亡し、マゼーパが埋葬された場所である。プーシキンはマゼーパの墓探しに熱中したが、その努力は徒労に終わった。ヴァルニツァで、「ポルタヴァ戦役」について多くのことを記憶しているコサックの老兵士から、カール12世の着衣、ヴァルニツァ要塞の塹壕、稜堡のあった場所、戦場のでこぼこについてさえ、彼らの持参した参考資料とぴったり一致した答えを得たものの、この老コサックはプーシキンの一番興味のあるマゼーパや彼の墓についての記憶は全く無いと言い張った。⁶

オデッサで外務院を誹首されたプーシキンは1824年から1826年までミハイロフスコエ村に蟄居を余儀なくされるが、その間に『ポルタヴァ』と少なからず影響を持ったルイレーエフの『ヴァイナロフスキー』⁷に関し、ルイレーエフと手紙で忌憚りの無い意見を交換し、歴史性のある作品の創作に期待した。だが、ルイレーエフの作品はプーシキンの期待を裏切るものであった。そのことについてプーシキンは『ポルタヴァ』初版の序文で⁸で露骨にルイレーエフの方法に反発し強調した。それは、自作に書かれていることの歴史的信憑性であり、正真証明の歴史的文献を引用していることであった。さらに、皇帝ニコライから釈放された後の1826年10月に邂逅したポーランドの詩人アダム・ミツケーヴィツ

³ コチュベイの同志、ポルタヴァのコサック隊長。

⁴ *Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. Т.5. С.67.*

⁵ 現在はモルダヴィアに属する。敗戦後マゼーパ逃亡時にはトルコの支配下にあった。その後ロシア帝国、ルーマニア、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国の支配を経て現在に至る。

⁶ *Липранди И.П. Из дневника и воспоминаний // Пушкин в воспоминаниях современников. 3-е изд., доп. СПб., 1998. С.330-331*

⁷ マゼーパの甥。ポルタヴァの戦いでマゼーパに協力した。1823年よりベストゥージェフ A.A.と共に *литературный альманах «Полярная звезда»* を発刊したルイレーエフは、ここに分割して *Войнаровский* を掲載した。1824年にこの作品の一部に触れたプーシキンは、ルイレーエフのロマンチズム一辺倒の詩が歴史的資料に基づくリアリスチックな傾向に一步足を踏み込んだかに見えたことで強く興味を惹かれた。1825年になって一冊に纏められたこの作品の意見を求められたプーシキンは厳しい批判をしなかった。

⁸ *Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. Т.5. С.335.*

チが、1828年春に出版した『コンラット・ヴァレンロット』⁹については、ミツケーヴィッチの行った歴史認識を最大限に活用して創作する方法に賛同し、自己の作品においても同様に歴史認識を基本に創作を行ったことは *Благой Д.Д.*¹⁰ の論文で述べられている。

「デカブリストの乱」後のプーシキンの作品に表現された皇帝への従順な態度は、プーシキンを裏切り者と酷評する世間の厳しい目に晒された。ロシアに於いて100年以上に亘り伝わって来た裏切り者とはウクライナのゲトマン・マゼーパのことであった。だが自身が創作しようとしていた作品の主人公が裏切り者であることに、プーシキンが精神的こだわりを全く持たなかったとは言い切れないであろう。マゼーパが実際に裏切り者であったのかどうかはポルタヴァの戦いから300年経過した現在でも解決していない問題であるが、ここでは、プーシキンが主張する『ポルタヴァ』の歴史性について先行研究を参考にしながら考察してみたい。

2. 『ポルタヴァ』の歴史的事実

『ポルタヴァ』は叙事詩とも歴史小説とも呼ばれているが、プーシキンの歴史主義については、*Ю.М.Лотман* が『*Посвящение «Полтавы»*』の中でプーシキンの歴史的事実への忠実性について触れている。「『ポルタヴァ』は歴史主義の問題が強烈にプーシキンの意識の中に立ち上がった時期に創作された」としながらも、1826年から1829年の間の作品には、歴史主義の方向性を取りながらも、ロマン主義を完全に破棄してしまおうとする方向性は表面上現れていないとしている。そして、「『ポルタヴァ』の意味論的構成を決定している複雑で多数のレベルの衝突は、《頌詩》とロマン主義的テクストの組み合わせのぶつかり合いとして現れている」と述べ、その例としてあげているのが、ピョートル一世の持つ歴史的合法則性とマゼーパのエゴイズムに対する厳しい否定的評価との関係である。つまり、プーシキンがマゼーパを当時の歴史的伝説より厳しく評価しているのは、歴史主義の発達を前にして、ロマン主義的个人主義を歴史や社会の客観的現象の中に埋めこんでしまうことの現れだとしている。¹¹

確かに、『ポルタヴァ』のマゼーパは、ピョートル大帝への裏切り者として他のゲトマンより厳しい判定を受けており、こうした判定が潜在的な前提となって書かれているように思われる。『小ロシア史』に於いて、マゼーパがぎりぎりの段階で最終的に行った決断——ロシアの敵であるスウェーデン王への加担——はツァーリへの憎しみの結果としての裏切りだけなのだろうか。他にもそれなりの理由があったようにもみえるが、はっきり

⁹ *Адам Мицкевич. Стихотворения, поэмы. Художественная литература. М., 1968.*

¹⁰ *Благой Д.Д. Мицкевич и Пушкин // Известия академии наук СССР. Т.15. вып.4. июль-август. 1956.*

¹¹ *Лотман Ю.М. Пушкин Биография писателя Статьи и заметки 1960–1990. СПб., 1995. С.258*

とした結論をここではまだ見出すことが出来ない。マゼーパを政治的指導者あるいは活動家として見るなら、簡単にそのように判定するのは難しいと考える。

3. 藤沼貴の『ポルタワ』の歴史主義について

『ポルタワ』の歴史主義について藤沼貴は、「歴史の物語化ではなく、客観的な資料に則していた」¹²として、『ポルタワ』について次のように述べている。

1829年に発表された物語詩『ポルタワ』はロシア対スウェーデンの北方戦争最大の戦闘ポルタワの戦い(1709年)を背景にしている。この戦闘はロシアにとって歴史的な勝利だったが、作品の主題はウクライナの首領マゼッパとその重臣コチュベイの娘マリアとの結婚、娘を奪われたコチュベイとマゼッパの確執、マゼッパによるコチュベイの処刑、スウェーデンに加担したマゼッパの敗北、マリアの発狂というドラマだった。¹³

叙事詩『ポルタヴァ』を詳細に読むと、ここに述べられている以上に複雑な主題が見える。藤沼貴は上に述べられた主題と背景となる北方戦争が如何なる係わりを持ったと考えたのであろうか。この文章からはそこが不明であり、またマリヤが実際に発狂したのかどうかは歴史的資料からは証明できない。

『ポルタヴァ』と『ボリス・ゴドゥノフ』は前後して書かれたせいからか、一般的に、両者は比較され、『ポルタヴァ』は藤沼貴の表現を借りれば「アヴァンチュールの筋立て」である。そして『ボリス・ゴドゥノフ』はロシア史上最も複雑なスムータ時代の権力争いという重さのある作品のように見られている。プーシキンは、勿論両作品の創作に当たって真剣にカラムジンの『ロシア国史』にあたっている。加えて『ポルタヴァ』の創作にはバンティッシュ・カメンスキーの『小ロシア史』が大きな役割を果たしている。

4. 国本哲男の『ポルタヴァ』の歴史主義について

国本哲男は、『プーシキン 歴史を読み解く詩人』¹⁴の中で、1829年に出版されたニコライ・ポレヴォーイの『ロシア国民史』のカラムジン批判にたいして、その書評(1830年)で反駁しているとして、次のようにプーシキンの意見を引用している。

¹² 藤沼貴「ロシア文学における歴史小説：プーシキンの歴史を題材とした著作4」『岩波講座 文学』第9巻、岩波書店、2002年、111頁。Полтаваの日本語表記には『ポルタワ』とするものと『ポルタヴァ』とするものがある。ここでは原文通りに表記する。マリアとマリヤの表記についても同様である。

¹³ 藤沼貴「ロシア文学における歴史小説」113頁。

¹⁴ 国本哲男『プーシキン 歴史を読み解く詩人』ミネルヴァ書房、1998年。

カラムジーンは、我が国の最初の歴史家であり、最後の年代記作者である。その批判精神の点で、彼は歴史家に属しており、素朴さと警句の点で年代記作者に属している。彼の批判は、伝説の科学的な比較研究、事実の鋭い探究、事件の明快な、忠実な記述にある……彼の物語が不十分なところは、資料が手にはいらなかったからである。彼は勝手な憶測を資料にかえることがなかった。彼の道徳的な考察は、修道僧のような簡潔さで、彼の物語に、古代の年代記のあの説明しがたい魅力を与えている。彼はそれを色どりに使っているのであって、決して本質的な意味を与えているのではない。(11 巻, 120 頁)¹⁵

国本哲男は、この纏めとして、「カラムジーンの『国史』は、その正しい事実の客観的記述のお陰で、道徳的考察のうらに、こう言った事実の歴史的意義、歴史の流れを読み取らせることをかこのうにしている」とし、それ故に、プーシキンにとって、何より重要なのは史実の正しさ、「正しい史実に基づいて構成された歴史——科学的な歴史が、重要なのである」¹⁶と結論づけている。更に、プーシキンの言葉として、「マゼーパは、私の叙事詩で、まさに歴史に於ける通りに行動している。(11 巻, 164 頁)」¹⁷が付け加えられている。

つまり、藤沼貴と国本哲男による考察によれば、『ポルタヴァ』は正しい史実により科学的に構成された歴史に基づいて書かれた作品であると理解するべきなのであろう。

上記に鑑みて以下の通り『ポルタヴァ』の構成、テーマ、歴史の真実性について考察を試みる。

5. 叙事詩『ポルタヴァ』の構成

詩は三歌から構成されている。その上に全体的に三つのテーマが重なっている。この三歌については次項で述べるので、ここでは三つのテーマを取り上げる。

第一のテーマは、ヴォルテールが『チャールス 12 世』¹⁸の主題としている北方戦争に於けるヨーロッパ列強によるアジアの争奪戦であり、見事に独立を守り通すことができたロシアの皇帝ピョートルを讃えることであろう。この勝利はロシアの将来にとって特筆すべきものであり、アジアへの勢力拡大を目指していたヨーロッパの国々にはあり得るはずの無いと思われたロシアの勝利に衝撃を受けた。プーシキンが試みた皇帝称賛は、戦闘の場

¹⁵ 国本哲男著『プーシキン 歴史を読み解く詩人』144 頁。

¹⁶ 国本哲男著『プーシキン 歴史を読み解く詩人』143 頁。

¹⁷ 国本哲男著『プーシキン 歴史を読み解く詩人』143 頁。

¹⁸ ヴォルテール (丸山熊雄訳)『英雄交響曲 チャールス 12 世』白水社、1942 年 を指す。

面に於いてピョートル大帝の神々しいまでの美しさを表現することであった。

それと対照的なのは軍隊の青い制服の色とカール王の蒼白な顔である。王は輝くことなくドネエプルの大河に流されて消えていく泡のようである。この勝利によって、ピョートル大帝は自信を胸にヨーロッパへ進出し、大改革実行へと滑り出す。

第二のテーマにおいて重要な意味をなすのは、ロシアとウクライナ、あるいは大ロシアと小ロシアの関係を表出して認識することであろう。プーシキンは、スウェーデンの力を借りてウクライナをロシアから独立させ、王座を争奪することを目的としているマゼーパを、権力欲の強い、陰険な人物のようにして描写している。だが、ウクライナをロシアから切り離して独立することは、コサックとウクライナの民の自由獲得のための戦いでもあった。

専制制度下における農奴性の厳しさからロシアの南に逃れ、コサック集団を形成し、ある程度自由な生活を経験してきた一部のスラヴ人には、再びロシアに併合され、厳しい専制主の言いなりになることには抵抗があったであろう。さらにウクライナにいたポーランド出身の富裕層やコサックの上層部は、必ずしもマゼーパの闘いに反対してはいなかったことである。それ故こうした不安定な状況に乗じてロシアからの独立を唱えるのは、ごく自然な成り行きであった。政治や外交の世界での意見の相異は何時、如何なる場合にも起き得ることである。契約あるいは協定の約束違反はマゼーパ以外のゲトマンも頻繁に行ってきた。その著しい例はボクダン・フメルニツキーにもみられる。だが、マゼーパの場合はこうしたことで100年以上も裏切り者と呼ばれ続けた。小ロシアに於けるマゼーパの存在の脅威は、ロシアにとって如何に大きな意味を持っていたかを認識すべきなのであろう。プーシキンはこの作品の草稿に、『マゼーパ』と名付けていたことは『批評への反駁』¹⁹ から知ることができる。だが、プーシキンは『ポルタヴァ』と名付けることで譲歩し、詩におけるマゼーパを、作品の隠れた主役とし、ニコライ一世の面前で面従腹背の態度を貫いたと思われる。

第三のテーマは、歴史の大きな歯車に巻き込まれ、打ちのめされてしまったマリヤのテーマである。批評家達はマリヤの存在について重要視していない。マリヤがマゼーパに近づいたのは愛によるのではなく、女の虚栄心だと言い張った。²⁰ プーシキンは宗教的な障害を乗り越え、両親の呪いを克服し、社会の目の前で軽蔑されても、彼女はマゼーパのためなら彼と共に処刑台に登ることも恐れないほど情熱的な女性に描写している。しかし突然、巨大で恐怖に満ちた歴史的事件のゲームの犠牲者となって滅びていった。詩人は作品

¹⁹ Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. 1949. Т.11. С.164–165.

²⁰ Сын отечества. 1829. ч.125. №15, 16 // Жизнь Пушкина: Переписка; Воспоминания; Дневники. В 2-х томах. Т.2. М.,1987. С.241.

の最後で、マゼーパの夢に狂気のマリヤの姿を登場させる。マリヤは父が処刑された時の恐怖を語る。この場面はプーシキンの詩的創造と考えられるが、この残酷な状況を描写することで初めてマゼーパの目を覚まし、一生涯苦悩させる。このマリヤのテーマは、「ポルタヴァ戦役」と同様に『ポルタヴァ』に存在する十分な価値があると信じる。

この三つのテーマの総合された形を持つ『ポルタヴァ』によってプーシキンは歴史物語を目指した。『ポルタヴァ』は歴史主義についてプーシキンが強烈な関心を持ち始めた時期に書かれている。次項はプーシキンが原典とした主たる歴史資料についての考察である。

6. 『小ロシア史』と『ポルタヴァ』に書かれた三歌

『ポルタヴァ』を書くにあたり、プーシキンが参考とした資料の中で主要な位置を占めているのは、歴史学者 Дмитрий Николаевич Бантыш-Каменский (1788-1850) の『История Малой России 小ロシア史』と言われている。²¹ 『ポルタヴァ』は、はたして歴史の客観的事実に基づいて書かれたものであろうか。『小ロシア史』の第三部は主に「マゼーパ」に振り分けられている。最初にその要約を述べ、次に『ポルタヴァ』に書かれた三歌の内容との比較検証を行ってみる。

1) 『小ロシア史』第三部「マゼーパ」の要約

マゼーパの前任者であるゲトマン・サモイロヴィッチ追放後の1687年7月24日に、スタルシーナの会議が開催される。マゼーパを寵愛していたゴリツィン伯爵が、マゼーパをウクライナのゲトマンに任命する場面から始まる。この時、ロシアとウクライナの間新しい協定が締結されるが、これによってペレヤスラフ協定にも増して、ウクライナにとっては完全に不利な条件が導入される。マゼーパはゲトマンに選ばれたものの、ウクライナでは誰もが彼に対立しているようであった。親類関係がもつれ合い、権力闘争が複雑化していた左岸のスタルシーナの間では、ポーランドで教育を受けたマゼーパはよそ者であった。

²¹ 正式名は《История Малой России со времен присоединения оной к Российскому Государству при Царе Алексее Михайловиче, с кратким обозрением первобытного состояния сего края》。『小ロシア史』は1821年2月15日に5冊限定で用意され、1822年に4巻本としてモスクワの Семен Селивановский 印刷所から出版された。これは出版許可を取得するために検閲委員会並びにその他の部署、教育省担当部門、帝立公共図書館、帝立科学アカデミーに配布するためのものである。1830年4月10日に改めて3巻本となって皇帝ニコライ一世に献呈されている。1841年に第三版が出版された。筆者が入手出来た『小ロシア史』はСПБ, Киев, Харьков で出版された1903年版である。これは第四版にあたり、注書として第三版より全く変更なしで印刷された旨が述べられている。

その同じ頃モスクワではあらたなる叛乱が起きていた。皇女ソフィアは専制君主を目差していた。ピョートルは悪者退治として、背信的な姉を修道院に閉じ込め、ゴリツィンを北方送りとし、独裁制を打ち立てた。ロシアにとって重要なこの時期に、マゼーパは偶然首都にいて、若いツァーリに個人的に取り入ることに成功する。1690年からの10年間は、ロシアが黒海への出口を求めて戦闘を続けた時代だが、チェルニーゴフ隊長の率いるマゼーパのコサックはアゾフを占領した。この勝利によってピョートル一世の夢は実現された。

スウェーデンに奪われたロシアの領地を取り返そうとした皇帝は、南方に於けるオスマン帝国との戦闘を休止し、1697年ナルヴァでスウェーデンとの戦闘態勢に入る。小ロシアのコサック軍はこの会戦には参戦していなかったが、会戦の報告を受けた8月以降は派兵されている。

マゼーパは20年に亘り皇帝に忠誠を示し、皇帝もマゼーパを信頼していた。だが、伝説によれば、膨れ上がるロシアの専制君主への不満がマゼーパを裏切り行為へ走らせ、スウェーデン王カール12世に加担する結果を生んだとされている。「ポルタヴァの戦い」に敗北してトルコに逃亡した失意のマゼーパは、1709年9月22日にベンデルルイで亡くなった。9月24日に葬儀が執り行われた。

2) 『ポルタワ』に書かれた三歌の内容との比較検証

下記に『ポルタヴァ』の第一歌から第三歌において夫々に触れられている項目を列挙すると同時に、これらの項目の主要な部分がどの程度に『小ロシア史』に著述された客観的事実に呼応しているものであるかを比較検証してみたい。但し、『ポルタヴァ』は必ずしも暦年通りに描写されているものではないので、多少年代が前後する場合もあり得る。

(1) 『ポルタヴァ』の第一歌

ポルタヴァの壮大な草地を所有する富めるコチュベイ。コチュベイの自慢の種である美しい娘マリヤ。ゲトマン・マゼーパからの結婚申し込み。マリヤの誘惑。両親の激怒。ロシアとスウェーデンの戦いへの序奏。ウクライナの不穏な空気。叛乱の予感。コサックのゲトマンへの不満とロシアへの憎悪。狡猾なゲトマンの洞察力。反逆の筋書き。ピョートル宛の密告状。密告者への審判。皇帝への恭順。皇帝の寵愛。

最初の情景はプーシキンが、ポルタヴァに僅かに残る城壁の跡から眺めた古戦場に広がる草原と城主館であり、マリヤについてはただ一枚残された肖像画から詩人が想像したものである。

『ポルタヴァ』の主要なテーマの一つとなっているゲトマンからマリヤへの結婚申し込

み、マリヤの誘惑、両親の激怒、それに続いてコチュベイの行ったツァーリへの密告、密告者への審判について『小ロシア史』から引用する。²²

コチュベイは長い間、マゼーパを憎んでいた。1704年、マゼーパはコチュベイの娘を唆し、その権力を持って不幸な娘と罪悪な関係を結び続けていた。²³（注100：マゼーパはコチュベイの娘マトリョーナの洗礼親であった。1704年初旬、彼はこの娘に結婚を申し出たのだが、信心深い両親はこの申し込みを断った。その時ゲトマンは、この許しがたい情熱を満足させるため、デミヤンと称する腕利きの召使をコチュベイ家に遣わせ、最初は3千、次には1万チェルヴォーネツ金貨を贈った。60歳の老人は情熱的な若者に変身し、権力者は奴隷となり、髪の毛をほんの一部送って欲しいと希った。そして金銭と彼女が首に飾る赤い珊瑚のネックレス、彼女が身につけるドレスを贈って誘惑した。悪者は女性の自尊心に勝利した。マゼーパは愛する娘を連れ去ったのである。侮辱された両親の家には号泣が響き渡った。このことを恥と感じたゲトマンはマトリョーナと別れなければならなかった。彼女は両親を軽蔑し、彼らの説得に耳を貸さなかった。彼女が目差した唯一の目的は、炎のような恋の対象と共に生き、そして共に死ぬことであった。マゼーパも彼女に劣らず苦悩していた。彼女に宛てた手紙は燃えるような情熱と、高齢者には相応しくないような力と感情に満ちている。読者の好奇心を満たすためにここに手紙を添付する）。

別離後マゼーパからマトリョーナに宛てた12通の手紙が添付されている。この手紙はコチュベイが後に行われる裁判の際にツァーリに提出したものである。手紙はゴロフキン伯からマゼーパに返却された。手紙の中から3通のみ引用する。手紙には日付がつけられていない。

- a. 私の心、私の花よ、貴女が居なくなって私の心は痛んでいる。貴女の眼差しも貴女の綺麗な顔も見られないのだから。
- b. 貴女を家に帰したことで、貴女が腹を立てていると聞いて身も細る思いだ。だが、これには訳がある。一つには、貴女の両親が貴女を力づくで連れてきて妾のように匿ったと言って大騒ぎするのが気に入らなかった。二つ目には、私の愛する人が私と居たいなら、私達は夫婦のように暮らせる。だが、教会の許可を得ずには呪われてしまうのだ。私は愛する人が、後になって私のことで泣くようなことになって欲しくない。
- c. 愛する人よ、貴女と話が出来ないことで私の心は痛んでいる。貴女を助けるために、そし

²² 『小ロシア史』の翻訳は筆者による。

²³ *Бантыш-Каменский Д.М. История Малой России в 3 томах. СПб., 1903. Т.3 С.373.* これより先本稿における *История Малой России* からの引用は（頁数）で示す。引用文中の数字は注№である。

て貴女の悲しみを軽くするために、私に必要なことをこの女性経由伝えてくれ給え。貴女の家族が貴女を修道院に行かせるのは何時のことなんだろう？私はそれまでにどうやって助けることが出来るか考えてみよう。何が必要か言ってくれ給え。(注 100)

上記の『小ロシア史』の(注 100)の内容からわかるのは、マゼーパは娘を誘拐したものの、両親の狂気の叫びに負けて両親のもとに娘を返したことである。娘が帰宅したとは言え、世間の評判を落とした両親は、マゼーパへの憎しみを日ごとに募らせていく。コチュベイはマゼーパの行動に目を光らせ、祖国の敵との秘密の関係を確信すると、ツァーリに密告することを決心する。祖国の敵との秘密の関係とは以下のことである。

マゼーパは 1706 年にコサック軍と共にミンスクへ遠征した。スウェーデン軍との戦いにコサックは勝利することが出来なかった。マゼーパの心に裏切りという不名誉な悪事が浮かんだのはこの頃である。ポーランドに居たマゼーパは、レシチンスキー王の親戚であるドゥールスカヤ侯爵夫人と知り合った。この時マゼーパは、条件付きで小ロシアをポーランドに統合することに合意した。つまり、彼はドゥニェープル両岸のゲトマンの地位に留まることである。この条約はスタニスラフとカール 12 世によって確認された。言い伝えによると、ロシアの専制君主への不満がゲトマンにこのような行動に向かわせたということである。皇帝は、ある時食事の席でコサック軍を戦闘部隊に編制し直し、ウクライナにロシア式慣習を取り入れるのが希望であると宣言した。マゼーパはこの計画に反論し、小ロシアに手をつけるべきではないと主張した。ピョートルは彼を裏切り者と呼び、口髭を掴みながら、「いいや、今度は貴方に取り掛かる番だ」と言った。ここからコサックの指揮官には皇帝への激しい憤激が生まれ、裏切りに繋がった。(368)

この部分につけられた(注 89)によると、皇帝にはこうした計画はなく、マゼーパが皇帝を喜ばせようとドイツ風の衣服を着て、コサックにもそうすることを強制しようと皇帝を説得したが、皇帝は同意しなかったと書かれている。さらに次のように記述されている。

しかし、こう仮定してみよう。ピョートルは激昂し易いのだが、マゼーパが侮辱されたからとて、それで彼が宣誓を破り、皇帝に復讐するだろうか。彼の信頼と友情に褒美を与えたのは皇帝ではなかったか。実質的には密かなる相談者という名誉ある地位に就かせ、ローマ帝国侯爵の称号とアンドレイ一等勲章を授け、彼の親類縁者一同に保護を授けたのは皇帝ではなかったか。(369)

コチュベイの密告に関する行動の叙述は長いので要約すると次のようになる。コチュベ

イの相談相手は 8 月 26 日にバトゥーリンにやって来た修道司祭ニカノールであった。9 月 17 日、ニカノールはモスクワに到着。ピョートル大帝に密告が伝えられたのは 1708 年 1 月であった。しかし、軍事面での仕事の繁忙のために皇帝は密告供述の捜査は後に延ばし、ポーランドに向かった。皇帝が全てを詳細に耳にしたのは 3 月 10 日であった。そして、マゼーパに手紙を書き、全てを知らせたが、皇帝自身は何も信じておらず、全ての噂は気分の悪い陰謀だとみなした。コチュベイは再度、密告書をアレクセイ皇太子に遣わせた。皇帝は再度ゲトマンにこのことを知らせた。ゲトマンは皇帝に宰相ゴロフキンを通して密告者を捕え、キエフに送検するよう依頼した。それは小ロシアの民の前で裁くためであった。皇帝はこれに同意した。コチュベイはその時ボルタヴァ近くのディカニカに居たが、ゲトマンが彼らを捕えるべくコサックを派遣したことを知り、逃亡した。ゴロフキンは彼らを捜索するために遣いを送り、皇帝の名において彼らの説明を聞くためにスモレンスクに来るようにと伝えた。ピョートルはマゼーパのもとにコサック一等大尉を送り、密告者へは中傷者としてどんな信頼も示されることはなく、彼らは死刑に値すると保証して安心させた。

密告者のコチュベイはイスクラと共に 4 月 18 日、皇帝の大本営のあるヴィテブスクに到着し、翌日、皇帝の大臣によって尋問が始まった。コチュベイは手紙でゲトマンが裏切りを行うとみられる一連の兆候を 26 項目挙げた。しかし、問題はコチュベイが証拠物件を何も持っていないことであった。彼の密告は公平な人間にとっては、少しも信頼できるものではなかった。このようなコチュベイの立証の後、彼らが監禁されたのは驚くべき事では無い。4 月 21 日に拷問が行われた。4 月 27 日、コチュベイは皇帝宛に手紙を書き、マゼーパへの憎しみの本当の理由を述べ、マゼーパからマトリョーナに送られた手紙の束を差し出した。

密告者は、4 月 30 日、皇帝の勅令によりしっかりと監視されてスモレンスクに護送された。皇帝はコチュベイとイスクラをマゼーパの許へ護送し、ザポロージェ・コサック全員の前で処刑することを命じた。コチュベイとイスクラはキエフに向けて送られ、6 月 29 日に到着した。7 月 12 日にスタルシーナ全員出席のもと、罪人はゲトマンに引き渡され、皇帝の勅令が下された。コチュベイは財産についての尋問を受けた。

(2) 『ボルタヴァ』の第二歌

マリヤの愛。ドゥリスカヤ夫人への妬み。ゲトマンの企ての吐露。皇帝の冠。玉座の夢。愛の確認。処刑前夜のコチュベイとイスクラ。ノスタルジア。全能なる神への祈り。尋問。財宝の隠し場所。三つの宝。責め苦の夜。マゼーパの苦悩。ウクライナの夜。星達の批難の眼差し。夜明け。母の嘆願。父の処刑。聖歌隊の祈祷の声。二人の殉教者。マゼーパの

空虚な心。マリヤの行方。母の追放。

第二歌ではコチュベイを処刑しようとしている前夜のマゼーパの苦しみと、父親の処刑について何も知らないマリヤとの会話の中で、ウクライナの皇帝になるというマゼーパの野心が吐露される。この会話において、マリヤが「ドゥリスカヤ夫人」について質問する。この人物がマゼーパの裏切りに係わっている人物である。『小ロシア史』には処刑前夜のコチュベイとイスクラの会話、マゼーパとマリヤの会話、母親がマリヤの寝室に現れ父の助命を嘆願する際の悲痛な呼びかけ、これらは存在しない。従ってこれらの会話に関してはプーシキンの詩的創作であろう。

コチュベイとイスクラの処刑の場面は以下のような叙述である。

7月14日、早朝、コチュベイとイスクラの苦悩は終わった。受難者の忍耐をもって耐えた新たな尋問(注113:コチュベイはディカニカに4,500チェルボーネツ金貨、2,000の外国貨幣、死んだ娘の財産だった1,000チェルボーネツ金貨があることを白状した)後、彼らの頭部は断頭台上で切り落とされた。処刑はベーラヤ・ツェルコフから8マイル離れた Борщаговка 村で、軍隊とスタルシーナの見守る中で実行された。礼拝のミサが終わるまで彼らの遺体は見せしめの為そのまま放置された。その後、棺に入れられた遺体はキエフに運ばれ、7月17日、ペチェールスキー修道院の庭、僧院の食堂の近くの教会に埋葬された。(388)

(3) 『ポルタヴァ』の第三歌

ゲトマンの悲しみ。スウェーデン王との密かなる連絡。仮病。カール12世のウクライナ進軍。マゼーパはデスナ河を渡る。寝返り。皇帝の憤怒。呪詛。新ゲトマンの選挙。パレイの解放。マゼーパの後悔。ツァーリとの和解の模索。ピョートルの登場。ピョートルの巢の雛鳥たちの疾駆。負傷したカールの登場。ポルタヴァの戦いの始まり。パレイの参戦。ヴァイナロフスキーに撃たれた若いコサック。勝利の時。ピョートルの祝杯。王とゲトマンの逃亡。領主館。ドニエプル河の岸边。重苦しい夢。マリヤの出現。夜明け。故郷の境界との別れ。百年の後。ポルタヴァの英雄の巨大な記念碑。ベンデールイの砦。ゲトマンの墓探し。教会に響くアナテマ。殉教者の墓。ヴェールに包まれた罪深い娘の運命。

皇帝への裏切りを決意したもののウクライナへの進軍に手間取るカール12世を待ちながら、マゼーパはロシア皇帝への恨みを心に隠し、その敵との秘密の連絡を取りながら、皇帝には最小の忠義を示した。

皇帝はコチュベイとイスクラをマゼーパに引き渡しただけでなく、慈悲深い手紙で恩知ら

ずを励ました。ロシアの陛下の虚栄心を満足させる信頼はマゼーパを撥ねつけたりはしなかった。巨大な歩幅でマゼーパは己の破滅に向かって急いでいた。個人的にマゼーパを知っていた **Феофанъ Прокоповичъ** は次のように記述している。²⁴

マゼーパはロシア人を嫌っているほどに心の底ではポーランド人にのめり込んでいる。だが、そのことに誰も気付かなかった。何故なら、彼は常にロシア人に尊敬と愛と好意を見せていた。鋭い彼の頭脳は人々の行動を観察し、その言葉を慎重に推し量り、そこに秘められた企てを推察しようとしていた。彼は感情を押し殺し、注意深く、どちらともとれる話には理解できない振りをした。何か秘密を探り出そうとする時は、自分がまるで隠しごとなどしない人間のように振る舞い、通常はワインを飲んで酔った振りをした。狡猾な人間には誠実だと言って褒めそやし、話し相手を酒で興奮させてこっそりと必要な目的を達した。(389)

皇帝からの厚意ある手紙に対しマゼーパは、戦争終結の暁には小ロシアの民に皇帝から褒美を下さるよう申し出た。このゲトマンの依頼には敬意が払われ、皇帝は民の損失に報いただけではなく、彼らの権利と優先権を保持することを確認した。

この間に、スウェーデンの勝利はこれまでに見られないほどの力を発揮する。オランダ、ロシア、ポーランド、サクソニアとヨーロッパの強国を恐怖に陥れていった。ピョートルは自国の勝利という点ではきわめて消極的な考えを持ち、スウェーデンの勝利が続く中で、和平交渉について考慮し、スウェーデン王に提案した。カール 12 世の答えは衆知の通りである。カール 12 世の答えは「モスクワでツァーリは何を御馳走してくれるだろうか」であった。これに対しピョートルは、「カールよ、アレクサンダーを真似ても、私の中にダリウスは見つけられない」と反論した。自己過信は偉大なる指導者達を盲目にする。王は、慎重なる敵が祖国の防衛態勢を固めようとしていた時期に、自国の將軍達にロシアの知事職を分配する計画をたてていた。

1708 年 6 月初旬に、スウェーデン軍はロシアの境界まで近づいていた。カールはスモレンスクに向かう振りを見せていた。それはウクライナに向かう際に障害が無いようにと考えた策であった。9 月 9 日、彼の騎馬兵は急いで向きを変えた。

こうした動乱の時期にマゼーパは如何にすべきか？病気の振りをして、いつものように、カールの小ロシアへの到着を待っていた。皇帝はマゼーパに軍隊全部を引き連れて騎兵隊と共に敵の輸送隊襲撃をキエフで待ち伏せるよう命令を下した。寛大なる皇帝はこの裏切り者に対して自筆で手紙を書いた。「貴方が騎兵隊と共にいてくれることが望ましいが、病気のことを考

²⁴ 『小ロシア史』の 389 頁の脇に付けられた注には『ピョートル大帝日誌』からの引用と記されている。

えると無理強いは出来ない。貴方の意志に任せる。貴方に任せた町の秩序を守り、敵がウクライナに侵入し、食糧について布令をばらまき始めたら敵の言うことを聞かないように必要な手段をとるように」。マゼーパはこの命令を受け取ると痛風の強い痛みを感じたが、皇帝の命に従うことは出来なかった。全ての事に気を配るピョートル大帝の配慮は大いに役に立った。いたるところにゲトマンの布令が現れ、マゼーパは強力な敵が近々出現すると人々を脅し、パン、金銭、教会と個人的財産をスウェーデン兵士に強奪されないよう地下に埋めるよう忠告した。全ての修道院と教会に東方正教を嫌う敵を即刻壊滅し、ロシアの国境から追放するよう神に祈ることを伝えた。彼は自分の裏切りを隠し、ロシア君主の信頼を維持することを願いながら、気付かないうちに自分自身に反する行為をしていた。皇帝から恩知らずのマゼーパへの配慮は同情だけではなかった。マゼーパの許へフランス生まれの医者まで派遣してきたのである。

(391)

マゼーパは重病の振りをしていた。全てはカール 12 世と迎えるためであった。バトゥーリンはコサックによる護衛兵に護らせていた。そこには十分な兵器、大砲、数件のパン屋がスウェーデン兵のために用意されていた。自己の大部分の財産はヴェーラヤ・ツェルコフ要塞に隠蔽した。

遂にマゼーパには決心しなければならない時が訪れた。敵は Стародубский 連隊に近付きつつあった。皇帝はマゼーパにコサック兵と共に現地へ向かうよう命令を下した。裏切り者はスウェーデン軍に合流する機会を狙いながら、ゆっくりと行動した。10月11日附の皇帝宛の手紙で、「デスナ河を渡り、もし力があれば、急いで皇帝の軍に合流します。もしこのような行軍で身体と心が私の痛風においてばらばらにならなければならないということです」。(392)

スウェーデン軍がウクライナに接近してきた時、2-3人の幹部はマゼーパの秘密の企てに気がついた。マゼーパは甥のヴァイナロフスキーをメンシコフ公の許に遣わせ、デスナ河の渡河が遅れていることの詫びと自己の献身をあらたに証明してみせた。ヴァイナロフスキーは、叔父がこの上官の信頼を失ったことに気付いた。彼が戻ってくると、マゼーパは偽りの不満を表し、彼の行動を離れずに見張っているロシアの大佐を通じてヴァイナロフスキーに示したメンシコフの激しい怒りを和らげてくれるよう依頼した。(396)

10月26日、マゼーパはデスナ河を渡った。(注122:『ピョートル大帝日誌』にはマゼーパに同行したのは1500人のコサックと記されている。)コサック兵は最初、彼らは敵に向かって行くものだと考えた。しかし驚いたことに、マゼーパはスウェーデン王と戦うつもりはなく、スウェーデンの敵であるモスクワ人に対抗して働くことを宣告した。さて、王とマゼーパはどのように顔を合わせるかについて話し合いはついていたのだろうか。10月29日、彼はゴールキ

一でカールと出会い自己紹介をした。その時老人の目は光り輝いた。彼には將軍達が付き添っていた。輜重兵、裁判官、2人の大尉、数人の陸軍大佐、1000人あまりのコサック兵。彼の前には彼の称号を表す印、馬の尾のついた竿とゲトマンの権標。彼はラテン語で王に話しかけた。手短に。しかし表情深く。コサック兵を王の保護の下に置き、王がウクライナをモスクワの軛から解き放って下さることを神に感謝していることを。この後、王の手に口づけた。王は立ったまま彼と話し続けた。マゼーパは64歳だった。中背、やせ形、厳しい顔つきをし、ポーランド風に髭をたくわえていた。(397)

この消息[マゼーパの裏切り]は、たちまち四方に飛んだ。ウクライナは不穩にざわめき立った。

(397)

皇帝がメンシコフ公からマゼーパの裏切りを聞いたのは10月27日の夕べであった。皇帝から海軍提督のАпраксин宛の手紙がマゼーパの突然の行動が如何に皇帝を驚かせたかを物語っている。「私の良心に反することであるが」として、ユダであるマゼーパは不屈きなことをした、彼は21年間自分に忠実であったが、今は人生の終わりに自己の民の裏切り者となったとし、神は公平であり、このような悪人が自己の企てを遂行することを許さないであろうと告げた。

(398)

11月3日、メンシコフ公はバトゥーリンを攻略した。土地の住民は全滅し、マゼーパの宮殿は灰と化した。彼の残した財産、40の大砲は勝利者のものとなった。(399)

皇帝はГлуховъにやってくると翌日の11月6日、間髪を入れず新しいゲトマンの選出を命じた。Живоначальные Троицы 教会の聖堂で典礼が行われた。この後、選挙が行われ、スコロパドスキーにゲトマン職をお願いすることになった。彼は老齢であることを理由にこの仕事を断ったが多数決で決定した。スコロパドスキーは実際、ロシアの君主の意思によって祭り上げられた。マゼーパの裏切り後、ピョートルは小ロシアの統治を精力的な人間に任せたくなかった。皇帝が自由に活動できるなら、ゲトマン統治は壊滅出来るであろう。(400)

11月6日より11日までの間、Глуховъにチェルニーゴフ大主教、キエフ府主教他各地から聖職者、陸軍大佐、スタルシーナが集合した。12日に皇帝と聖職者はトロイツキー教会の大聖堂で典礼に耳を傾け、マゼーパとその追隨者に永遠の呪詛(アナテマ)を浴びせた。(注131:この陰気な儀式はマゼーパを地獄に送る同行者と呼ばれ、皇帝が参列され多くの役人や民衆も集まった。聖職者は黒い祭服に身を包み、黒い蝋燭を手にしていた。)同日、広場にマゼーパのはく製人形が持ってこられた。彼の罪と罰の決定書が読み上げられた。メンシコフ公とゴロフキン伯によってゲトマンに授けられた証書、実際には秘密の相談役の肩書が引き裂かれ、聖ア

ンドレイ一等勲章のリボンが人形からはずされた。そのあと、裏切り者の肖像画が刑吏に投げつけられた。人々はそれを足で踏みつけ、刑吏は人形を縄で縛り町中を引きずりまわし、刑場で絞首刑にした。その後、バトゥーリンで捕えられたマゼーパの追隨者達が処刑された。聖職者達は印刷した公布によって小ロシアの民に新しく選出されたゲトマンに服従することを宣告した。(400-401)

この時、皇帝は名誉あるパーリイを思い出した。1705年、マゼーパの密告でシベリア送りにした人物である。彼にはすぐに自由が告げられた。(404)

マゼーパへの呪詛はウクライナだけではなく、全ロシアにも響き渡った。11月12日、モスクワのウスペンスキー寺院では、皇子アレクセイ・ペトローヴィッチが列席して、ゲトマン・イワン・スコロパドスキーの選出に祈りが捧げられた。礼拝の前に大聖堂の長輔祭がマゼーパの裏切りが続いて起こったことを述べた皇帝の手紙を読み上げた。その後、リャザンの府主教とムロムのステファンが説教を行い、その中でマゼーパがロシア皇帝に信頼するに足る熱心な行いをしたのだが、その後、恥となる裏切り行為を行い、スウェーデン軍に加担したことを語った。説教が終わるとステファンは周囲の聖職者達に向かって言った。「皇帝への裏切りによって彼を呪詛する」。(401)

11月18日、敵軍はРомныに進駐した。軍隊の主要部隊は冬用住宅に駐屯した。11月30日、皇帝はマニフェストを發布して全ての小ロシア人に、元ゲトマンの家財道具の半分は発見者に委ねることを発表した。(404)

カール12世はマゼーパの書いたマニフェストを小ロシアで公布した。そこにはピョートルとの戦いの勝利を宣言し、モスクワのツァーリの暴政から小ロシアの民を護り、彼らの失われた権利、自由、全ての特典を民に戻すことを約束することが書かれていた。(404)

カール12世は最初ピョートル一世のマニフェストを嘲笑っていた。しかし、スウェーデンの作家が後に認めているのは、ロシアの君主の公布と新しいゲトマンの布令は、カールのものより有利に小ロシア人に効果を発揮した。そしてマゼーパが失望を味わったのは、カールが種々の約束で小ロシアの民を引きつけようとしても、スウェーデン兵は恒常的に小ロシアの民と戦わなければならなかったことである。より良い公平な讃辞は、この動乱時代にピョートルが用いた筋の通った注意深い方法に向けられた。(405)

ピョートルは全ての企てに注意深く、5大隊からなる警備隊をポルタワに向かうよう指示した。極寒はロシア国の活動を弱めるものではなかった。(406)

6月27日、ポルタヴァ郊外で輝かしい戦いが拵げられた。ピョートルは聡明なる裁量と模範的な勇敢さによってその名を永遠のものとし、誇り高き敵の功名心に燃えた姿に終りを告げさせた。(408)

カールとマゼーパはトルコへと落ち延びた。マゼーパの深い悲しみは絶望的となり、やがて永久にこの地表から消えた。彼は1709年9月22日、ベンデルイで亡くなった。スウェーデンの情報によれば、老齢と悲しみと苦しい道中から、またトルコにいるロシアのスパイによれば服毒によるそうである。9月24日、葬儀が執り行われた。悲愴なマーチを演奏する音楽家達が先頭を歩き、そのあとを一人の将校が宝石と真珠で飾られたゲトマンの権票を携えた。サーベルをむき出しに持った数人のコサック兵が六頭の白馬にひかれた馬車の周囲を囲んでいた。棺のうしろには音楽がかき消されてしまう程号泣している多くのコサック兵とスタルシーナが続いた。マゼーパの遺体はベンデルイ近くのワルニツァに葬られた。(410)

プーシキンの『ポルタヴァ』はこうして『小ロシア史』を検討してみると、詩人が自身で述べているように歴史に基づいた科学的な作品であることは理解できる。唯一つ、何故か歴史の叙述に違反していることがある。それはマトリョーナの扱いである。『小ロシア史』に添付されているマゼパーパからマトリョーナに宛てた12通の手紙が如何なる状況で送られ、如何なる内容を持っているのかについてプーシキンは全く触れていない。手紙には『ポルタヴァ』に登場する傲慢で権力欲の強いマゼーパは姿を見せず、恋する老人の優しさと弱さがにじみ出ている。『ポルタヴァ』は権力者同士の生きるか死ぬかの闘いであった。**裏切り者**としてピョートル大帝に対抗するマゼーパには強さを見せることだけが必要であったのか。女性の前で見せる優しさは無用だったのか。プーシキンは故意に手紙を無視したとも考えられる。しかし、手紙が存在し歴史書に掲載されているのは歴史の事実である。

7. ベリンスキイの唱える叙事詩とは？

歴史的文学作品を書く際には、歴史的真相の書かれた文献に深い注意を払うことは当然のことであるが、そうした歴史的事実に光をあて、手元に惹きつけてじっくり眺めながら、主人公達の真の人間の叫びを感じとることも同様に重要である。それが文学者の感じるインスピレーションであり、歴史家と違って文学者に許されることであろう。しかし、ピョートル大帝の形象をテーマとして作品を創作するのはプーシキンのような偉大な作家にとっても著しく困難で複雑な作業であったであろう。このことについて、ベリンスキイは、「ピョートル大帝はあまりにも個性的で、性格が強く、従ってあまりにもドラマチックであり過ぎたためにどのような叙事詩の材料にも向かない。その上叙事詩のためにはただ半

ば歴史的な、半ば神話的な人物たちだけが役立つのである」²⁵と述べている。概して、ベリンスキイは通常 поэма（物語詩あるいは叙事詩）と呼ばれている『ポルタヴァ』を叙事詩とは呼べないとしている。

ベリンスキイの考える叙事詩とは如何なるものか。ベリンスキイは、「『叙事詩』とは、全民族が参加した歴史的な事件——民族の宗教的、道徳的、政治的存在と融合し、民族の運命に強い影響を与えたような歴史的な事件——の理想化された表出である」²⁶と解釈しており、「あまりにも個人的な、いささかも歴史的でないこのような〔マゼーパの恋物語〕思想のために、そのためにポルタヴァ戦役とピョートル大帝を描く値打ちがあったであろうか？そうは思わない！」²⁷と述べ、更に、「『ポルタヴァ』は主人公の無い叙事詩となった。〔…〕。事件の主要な、大きな部分がマゼーパの恋物語に捧げられている叙事詩の主人公をピョートル大帝と考えるのは滑稽であろう」²⁸とさえ述べている。

ベリンスキイの考えは議論する余地のないものなのであろうか。確かにベリンスキイが指摘しているように、この作品はかつて無い程の激しい批判に曝された。『ルスランとリュドミーラ』以後のプーシキンの作品で、『ポルタヴァ』ほど論争と論議をまき起こしたものは一つとしてなかった。大詩人の人格にいささかの敬意も払わずに罵倒された。そしてこの時以来、若干の批評家たちは、自分自身の大胆さと、プーシキンもまたその辺の平凡な作詩家のように罵倒することが出来るという自分の発見とに気をよくして、その称賛すべき大胆さと幸福な発見を利用する機会を逃さなかった²⁹としている。確かに、『ポルタヴァ』出版後の1829年には<モスコフスキー・テレグラフ>、<祖国の息子>³⁰等に厳しい批評が掲載されたが、プーシキンもまた『批判に対する反駁』³¹を発表して作品の正当性を主張したのである。

8. 『ポルタヴァ』についての批評と『批評への反論』

前述した<モスコフスキー・テレグラフ>並びに<祖国の息子>に掲載された『ポルタヴァ』への批評の中には、歴史の彎曲、60歳にもなる年寄りマゼーパの恋と若いマリヤの情熱への疑心暗鬼、ピョートル大帝への復讐の理由の不可解さ、戦場の描写の誤り、バ

²⁵ *Белинский В.Г. Полное собрание сочинений. Т.7. М., 1955. С.448* 翻訳は小澤政雄『プーシキン伝』光和堂、1987年 を使用した。

²⁶ *Белинский В.Г. С.403*

²⁷ *Белинский В.Г. С.407*

²⁸ *Белинский В.Г. С.409*

²⁹ *Белинский В.Г. С.402*

³⁰ *Кунина В.В. Жизнь пушкина. М., 1987. Т.2. С.239–242.*

³¹ *Пушкин А.С. Полное собрание сочинений. 1949. Т.11. С.164–165.*

イロン詩との比較などを指摘する批判があった。これらに対し、プーシキンは『批判への反駁』を発表して反論したのだが、批評家が問題としているようなことに、プーシキンが真面目に回答する必要があったのかどうかは疑問である。批評家が問題としているものは、本質的な問題とはかけ離れているように思われる。

9. 終わりに

歴史上におきた一つの事件について出来得る限り多くの資料や文献を、客観的判断に基づいて歴史家が記録することと、同様に作家が文献を蒐集して文学作品を書くことには、客観性に異なった結果が生じる可能性があることは否定できない。

歴史の信憑性に関しプーシキンは『ヴァイナロフスキー』を批判し、批評家は『ポルタヴァ』を批判した。プーシキンは『批判への反駁』に於いて『ポルタヴァ』に書かれた歴史の真実性を懸命に主張した。だが、こうした論戦があったにも拘わらず、『ポルタヴァ』に描写されたマゼーパとマリヤの恋の行方は、事実とはかなりかけ離れたものであった。

そして更に歴史の信憑性について言えば、驚くべきことが起きている。現時点では、マゼーパの立場がこれまでの歴史を逆転するほどに変化した。ソヴィエト政権下では裏切り者として教え込まれてきたマゼーパ像は、ソヴィエト連邦の崩壊とウクライナの独立を機会にウクライナの英雄に仕立て上げられつつある。本年「ポルタヴァ戦役」300周年を記念してマゼーパ研究は、マゼーパ自身が教育を受け、その発展に寄与したキエフ・モヒラ・アカデミー³²を中心として活発化している。マゼーパの本格的研究は今後ますます期待できるものとなるであろう。しかし、筆者がこれから行おうと試みているのはマゼーパの真相を追い求めることだけではなく、『ポルタヴァ』に登場したマゼーパが、1884年に初演されたオペラ『マゼーパ』に於いて、チャイコフスキーによって如何なる形象として捉えられ、舞台に登場したかを検証することである。

³²Национальный университет «Киево-Могилянская академия» 1632年創立。外人カトリック教徒によって創設された宗教学校。カトリックの信仰とポーランドの規律が植え付けられた。一時閉鎖されたこともあったが、1992年に公式に大学として開校した。

Интерес Пушкина к Петровской эпохе: творческий замысел и история создания поэмы «Полтава»

КОМАЦУ Ююко

Интерес Пушкина к Петровской эпохе отразился в таких произведениях, как стихотворение «Стансы», незаконченный роман «Арап Петра Великого», поэма «Полтава», поэма «Медный всадник», стихотворение «Пир Петра Первого» и исторический труд «История Петра Первого».

Во время высылки на юг Пушкин посетил Киево-Печерскую Лавру. Это было в 1821 году. Пушкин видел могилу Кочубея и Искры и узнал из надгробной надписи трагедию, произошедшую под властью украинского гетмана Мазепы. Это произвело на него сильное впечатление и оставило в душе поэта глубокий след надолго. В 1828 году появляется поэма «Полтава» на сюжет полтавской битвы. Хотя поэма повествует о военной истории, она достаточно лирична. Через полвека композитор П.И.Чайковский на сюжет поэмы «Полтава» создал оперу «Мазепа», где дан образ юной девы и ее лирической любви. Данная статья является первым шагом к анализу оперы «Мазепа» Чайковского и посвящена только рассмотрению творческого замысла Пушкина и душевного процесса его творчества. При этом также с исторической точки зрения рассматриваются поэмы К. Рылеева «Войнаровский» и А. Мицкевича «Конрад Валленрод».

При жизни Пушкина литературные критики беспощадно критиковали его поэму, настаивая на том, что в ней искажены исторические факты. Также указывалось на неубедительность сюжета (например, на то, что в поэме молодая женщина влюбляется в старика, Пушкин изобразил Мазепу злым и глупым, заглавие поэмы ошибочно и т.д.). Против этого Пушкин написал «Возражение критикам "Полтавы"», где он старался показать, что Мазепа действует в его поэме так же, как это происходило в истории. Но, неизвестно, что было ли правильно то, что он настаивал в его статьи. Точно бывает отличие между историческими материалами и содержанием его произведения.

Прошло уже 300 лет со времени Полтавской битвы. Украина – бывшая Малая Россия – стала независимой страной, а Мазепа стал героем Украины, хотя он долго считался предателем Петра Первого. В последнее время при активном участии национального

А.С.プーシキンのピョートル大帝時代への関心——叙事詩『ポルタワ』の創作を通して

университета Киево-Могилянской Академии проводится большая научная работа по изучению истории Мазепы и его времени. Возможно, в недалеком будущем нас ждут новые находки.